

華南のタングステン鉱脈

石原 舜三 (鉱床部)
Shunso ISHIHARA

中国のタングステン資源は 昔も今も華南の鉍脈型鉍床によって代表される。その主たる原因はこの地域に広域的に割目が発達したためであり また W-L-i-F などに富むジュラ紀花崗岩類がこの地域に貫入したためである (本文39~51頁参照)。

鉍脈型鉍床の代表例は 江西省の最南部の大余付近のものである。西華山鉍脈群は花崗岩体中に分布する。花崗岩特有の山地の南面に白色のズリが散在し鉍山設備が点々と設けられており (写真1) 花崗岩中の6.5条以上の鉍脈が採掘されている。



写真1 西華山鉍山寸景。最高800m付近の露頭部から230mLまで 緑の斜面に坑道を入れて採掘が続けられている。

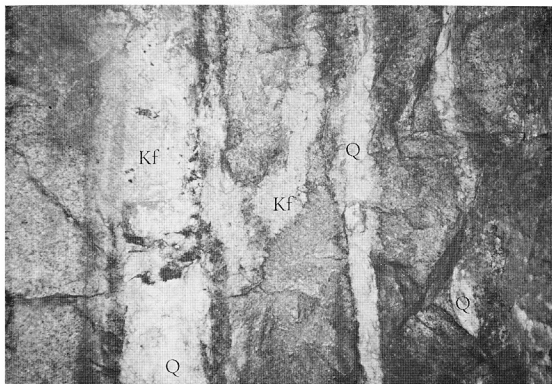


写真2 西華山鉍床 594mLにおける第53脈。ここでは石英(Q)よりカリ長石(Kf)が多いことに注意。鉍脈間の暗色部は完全にクライゼン化している。

西華山鉱床から北西へ向けて花崗岩体の貫入軸があって、その上に同様な東西系鉱脈がみられる。最も花崗岩体をはなれた漂積鉱脈群は革命後の組織的探査により発見された新鉱床で

あり、近代探査成果の標式地とされている。ここでは鉱脈は下部で太く、上方へ網状状にばらける。竹箒きを逆にした形をしている（写真3—6）。



写真3 漂積旧坑部の露岩風景。堆積岩地域であるため地形は急峻である。



写真4 新鉱床露頭部（海拔900m付近）における白雲母—石英細脈（Q）。この様な細脈を手懸りに、花崗岩から離れた堆積岩地域の鉱脈探査は実施される。

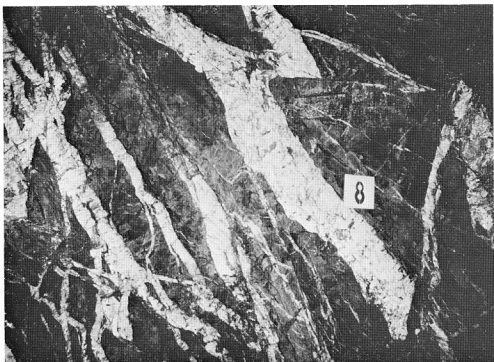


写真5 漂地 496 mLにおける鉱脈群。露頭部より鉱脈はかなり肥大化する。品位計算は露頭部と同様に幅10cmの溝掘りサンプルの分析値に基づいておこなわれる。ここでの鉱脈の生成は6期に分けられている。

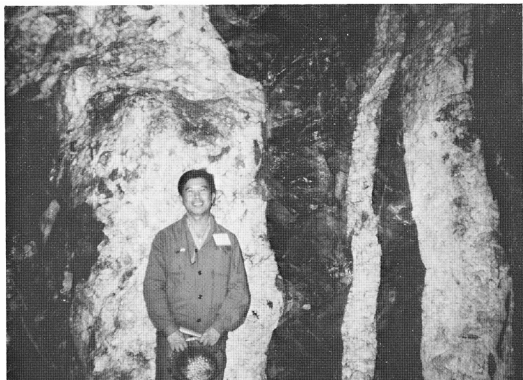


写真6 漂地 388 mLにおける大脈部分。人物は 通訳の労をとられた北京の謝仲恒氏。



写真7 鉱脈は広域的に力がかかった諸岩石に鉱液が上昇して形成したものとわれ 主に剪断性である。張力割目に多くみられる鉱脈中心に向って生長する鉄マンガン重石などはまれである。写真は漂塘 280 mL。大脈部の鉱脈で 鉄マンガン重石(黒色) ツィンワルダイト(暗色)が石英脈中に不規則に分布する。



写真8 漂塘鉱山の子供達。鉱物資源開発は中国の重点政策であり 子供達の表情も明るい。